

義太夫

義太夫協会会報
第83号

平成18年7月15日

社団法人 義太夫協会発行
〒104-0061 東京都中央区銀座
4-13-11 文明堂3F
TEL・FAX (3541) 5471
<http://www.gidayu.or.jp>

つきぬ感謝を〜吉川英史先生を偲んで

社団法人義太夫協会会長 波多一索

元義太夫協会会長の吉川英史先生ご永眠とのお知らせを伺い、心からお悔やみ申し上げます。当協会の発展に多大な貢献をなされた先生を偲ぶことばに、急遽かえさせて頂きました。お亡くなりになられたのが四月十三日、享年九十七歳でした。

先生は、日本の伝統音楽研究の第一人者で文化功労者、芸大の邦楽科設立、学校教育への邦楽導入などで主導的な役割を果たされました。ことに伝統音楽の普及発展のお仕事を大変大切になされ、先生の放送やご著書で邦楽に親しみをいだきこの道に入られたり、関心を持たれた方が昭和三十年代には沢山おられました。先生には沢山の想い出がございませぬが、ここでは二つに絞らせて頂きます。一つは昭和三十六年(一九六一)私がビクターに入社五年後、先生を中心に中能島欣一、小野衛先生と三人の先生の監修で、「箏曲と地

歌の歴史」と言うレコードを制作した折のことです。これも前述の箏曲地歌の啓蒙を目的としたものですが、私もはじめてディレクターとして先生方のお手伝いさせて頂きました。その中で教えられましたのは、先ずは選曲と演奏者の厳選、無駄のない平易な解説と言うことで、徹底的なご指導を頂きました。

おかげで、このレコードはその年の芸術祭大賞に選ばれ面目をほどこしましたが(同じ会社の「歌舞伎下座音楽集成」と共に)、それ以上に私にとって収穫だったのはレコード制作の基本を教えて頂いたことで、その後の私の変わらぬ指針となりました。

例えば、こうした入門レコードの場合、演奏者一つを取り上げても身近かな演奏者で作ること出来ないこともないわけですが、先生は入門レコードだからこそ良いものでなければならぬと言うお考えで、そうした手抜

きを厳しく指摘頂いたのを思い出します。この時も、短い曲を演奏するのにも出演者は全国の極め付きの一流の先生方をお招きしました。例えば「平曲」の録音の折には、名古屋からわざわざ三品正保先生にお越し願うといった具合で、後年になってご遺族の方から「あの折は朝、名古屋から東京のスタジオに着くと、休む暇もなく録音と言うことで驚きました」と伺い、新幹線も今のようになかった時で多くの先生にご迷惑をおかけしたのではと反省しております。

もう一つは平成五年、日本の伝統音楽の成果を音と映像で記録公開、次世代への継承を目指してビクターが(財)日本伝統文化振興財団(以前のビクター伝統文化振興財団)を設立した時のことです。こうした場合法人の信用を高めるために、役員に著名な先生の名前だけお借りするケースがよくあるのですが、当時先生はご高齢でかつご多忙であったにもかかわらず、財団の認可を得るために度々文部省に足を運んで頂きその存在意義を熱心にご説明下され、まことに恐縮したことを覚えております。

この二つのことがらは、先生が常に伝統音楽の普及発展にいかに関心をもち、先生は当義太夫協会の発展のためにも大変ご尽力下さったわけで、先生のご恩にむくいるためにも残された私どもは協会の発展に尽くさねばと改めて思う次第です。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

追悼 吉川英史先生



故吉川英史先生を偲んで

社団法人義太夫協会前会長

景山正隆

吉川先生がお宅で車椅子の生活をなさるようになってからはお目にかかる機会が全くなかったので、「朝日新聞」に掲載された訃報に接した時は、あまりにも突然のことで、暫し呆然とせざるを得なかった。

一昨年の初夏、国立劇場小劇場で図らずもお目にかかった時（偶然隣席であった）。「この頃どうも脚が弱って」などと言われながらも、常に変わずお元気な様子に見受けられた。人一倍健康に留意しておられる先生のことだから、恐らく、昭和五十九年に百一歳のご長寿を全うされた、先生が師として敬慕された田邊尚雄先生よりも長生きをされるのではないか、と思っていただけに、まず念頭に浮かんだのは、悲傷の思いと共に「さぞかし残念に思われたことだろう」であった。

それでも、音楽を中心とする日本文化のために多大の業績を世に残された満九十八歳のご生涯は、長命を全うされたという他はないであろう。

私が先生のお名前「吉川英士」を知ったのは、終戦直後、学徒出陣（海軍）から復員して東大に復学した時であった。当時、先生は美学美術史学科の非常勤講師として「日本音楽」を講じておられたが、国文学科の私は、

時間割の関係で残念ながら受講することが出来なかった。当時三十八、九歳の先生は、既に日本音楽の研究者として著名だったのである。

先生と私との最初の出会いは国立劇場小劇場のロビーであった。杵屋栄左衛門師の紹介によるもので、義太夫協会が社団法人の認可を受ける少し前のことである。この出会いがなければ、後に、私が先生のご要請を受け、義太夫教室の講師・役員となり、更には三代目会長に就任するようなことにはならなかったであろう。

文化功労者となられた先生の広大な業績についてはここに記すまでもないであろう。先生の波乱に富んだご生涯、独特なユーモアのお得意であった優しいお人柄などについては、題名からしてお琴の音を振った洒落っ気のあるご著書『謝々天主人回顧録』を拝読すれば、面目躍如として知られる。（社）義太夫協会も、初代会長としての吉川先生のご尽力がなければ、健全な運営のもとに歩み続ける今日の協会はなかったかも知れない。

ここに改めて謝意を表し、謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。合掌

略歴

一九三三年東京大学文学部卒。日本の伝統音楽の芸術性と価値を説き続け、邦楽の隆盛に貢献。

一九七二年に紫綬褒章、放送文化賞。七九年に勲三等瑞宝章。九三年に文化功労者顕彰をそれぞれ受けられた。

東洋音楽会会長、文化庁芸術祭執行委員長、宮城記念館館長などの要職を歴任。当義太夫協会においては、昭和四五年の社団法人化に際し尽力され、同年会長に就任。四期一六年勤められた後、名誉会長、最高顧問に就任。



竹本 朝重

吉川英史先生、このお名前は、義太夫協会の歴史の中に深くきざまられて、永遠に伝えられることをごいませう。

今から三十六年前、協会が社団法人となります折に、先生のお力を仰ぎ、おかげ様で幸いな一頁を開く事が出来ました。そして御在任下さること五期、十五年にわたり次期会長を田辺彦雄先生にお託し下さる迄、当時副会長であられた豊澤仙廣師と共に誠にこまやかにお世話下されました。

女流義太夫につきましても、長年の定席「本牧亭」の閉鎖という危機を、先生のお力で支障なく「国立劇場演芸場」の立派な舞台で演奏出来るという思いがけぬ幸運に恵まれました。今日に致して居ります。此の度大変悲しいお知らせに接し、改めてこれ迄の御礼を申し上げます、つつしんで御冥福をお祈り致します。

合掌。

竹本駒之助

月日のたつのは、本当に早いもので、仙広副会長がご勇退なさる時、吉川先生から次期副会長には、朝重さんと私の二人で——とご指命下さり、その重責を担わせて頂きましてから、もう二十年以上になります。

長きに亘り、協会の発展の為にいろいろと心を砕いて下さり、常に義太夫節の芸のよき理解者として、公私共にご尽力頂きました事感謝の気持ちで一杯でございます。

誠実でまっ直なお人柄で、つい数年前まで

演奏会にも繁く足をお運び頂き、本当に頭の下がる思いでございます。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌。

追悼 竹本素八師



【略歴】

明治四五年(一九二二)二月十五日岡山県生まれ、大正十四年竹本素女に入門、同年六本木亭において初舞台。義太夫協会月例公演会には平成十年四月までほぼ毎月出演。

昭和四七年より義太夫教室講師を九期務めるほか、竹本研修、歌舞伎俳優研修、東宝ゆかた会、富山県砺波市子供歌舞伎、飯田市人形芝居、市川猿之助門弟等の義太夫指導に当たる。

昭和五五年重要無形文化財義太夫節総合指定保持者に認定。

昭和五八年芸団協芸能功労賞。
平成五年勲五等瑞宝章。

素八さんありがとう

池田弘一

私は学生のころから本牧亭で義太夫を聞いてきた。それがある期間ちょっと途切れた。その私を義太夫の世界に引き戻したのは素八さん、あなただ。あれは昭和五十三年だかの暮れ、人からもらった招待券で出かけた。三段目の師直が素八さん。何か心に残るものがあった。次の日は木戸を払って聞いた。五段目だった。あの定九郎と与市兵衛のくどくどとしたやりとり、格別面白いとも、うまいとも思わなかった。しかし、そのむきになって大真面目に定九郎を語っている、全身をかけての語りにひかれた。こういう人がいたんだ。私の本牧亭通いが復活した。

素八さん、あなたはどうかしてあまでも生真面目だったのだろう。土佐廣さんと「日蓮記」の佐渡島を語ったとき、下総中山の法華経寺へ出かけました。お参りをすませ、中門のきわの店で土佐廣師匠への土産を調べている姿も忘れられない。あれはただ物を買っているだけの姿ではない。自分の敬愛する師の前にささげる供物を求めている姿だった。

叙勲の会、うれしかったね。源平さんの糸での「箱根」、あれは素八さんでなければ語り出せない世界だ。もう聞けないんだねえ。挨拶の時、素八さんと私と間に置かれた古い古いバスケット、それに花を差した。あれはあなたが東京へ初めて出てきた時に提げている

た物だったんだね。苦勞を共にしてきた、自分の苦しみの染み込んだバスケットを栄光の日に、己れのかたわらに置いて喜びを共にした素八さんはすばらしい人間だ。

バスケットたった一つが財産だった少女は浄瑠璃という宝物をいっぱい身につけて、次の世界に旅立ってゆく。素女師匠も土佐廣師匠も大いに喜んで豪華な一座を組むだろう。そうしたら遠慮なんかしないで、お軽を引き受けなさい。素女さんに平右衛門、土佐廣さんに由良之助。よい人かわいいい人であった素八さんの、お軽のあのクドキが聞こえてくる。

素八さん、永いことありがとう。

今年の遅い櫻が終わろうとしていた矢先、素八師匠の訃報を聞きました。最後まで不義理をしてしまいました。大阪に笑顔で送り出してくれた師匠に何も恩返しができないまま月日は経っていたのですね。今まで有り難うございました。

〔素之助〕

教室で「後はもとはっちゃんに頼んだからね」と猿三郎師に紹介され、お稽古をして頂くことになった。教室終了後は当然のように師匠のところへ。この上なく義太夫を語っているのが好き。自分で泣いてしまうのは語れていない証拠、と言いながら汗と涙を一緒に拭いている。そんな師匠が大好きでした。

〔素丸〕

駒登久師追善会、開かる

去る三月十一日(土)に、両国回向院本堂にて、鶴澤駒登久師三回忌追善の会が、駒治、駒清両門弟の主催にて行なわれました。

池田弘一先生のご挨拶の後、絵本太功記より、妙心寺の段―続いて傾城恋飛脚より、新口村の段の二番が演奏されました。

「新口村」は、駒治さんが亡師の演奏の中でも、大好きだった演目との事。先代の綾之師と一緒に舞台を勤めていらしたので、今回の綾之助さんとの舞台は、思いも一入だったようです。

回向院の阿弥陀如来を背にした演奏は、荘厳で追善の会にとってもふさわしいものでした。



一口ビーにて
亡師の懐かしい写真と共に
左より
駒治さん、池田先生、綾之助さん

ほんに気がメーリヤス(一杯目)

鶴澤慎治

平成十七年度末、国立劇場の養成事業の一環として十年以上前に企画された『竹本メリヤス集成』の、未刊だった解説書が出揃い、ようやく完成しました。演奏録音に当たられた松三郎・重松両師はいうに及ばず、総監修の景山正隆先生、実際の作業の多くに関わられた葵太夫様、そして何といっても、この編纂作業が継続する間に関わられた、国立劇場の忍耐強い職員の皆様にはただ感謝の念でいっぱいあります。

私はこの『竹本メリヤス集成』の中で、地歌に関係したメリヤスについての原稿を担当させていただきましたが、その執筆過程で得られた知識や副産物で、本会報の隅っこを埋めることが可能であるということが分かり、この項を担当させて頂きます。そのような経緯で得た知識ですので、内容、というか視点に若干の偏りがあることを最初にお断り申し上げます。メリヤスを繰り返して弾くときの数え方にならぬ、今回が一杯目となります。とりあえず三杯くらいはいきたいと思っておりますが、紙面の都合で途中で付き直す(次号に続く)こともあれば、筆者の都合によるニューケシ(入稿をサボる)、最悪「それありません」(ボツ)になってしまいう可能性もあります。いずにせよ、舞台でのメリヤスと同様、必要に応じて長かったり短かったりの連載となる予定です。(以下次号にて付き直し)

◇鶴澤三生師聞き書き◇

今年は二代目鶴澤三生師の二十三回忌にあたります。協会に、三十五年前のお声が残っていましたので、お届けいたしましょう。

録音は、昭和四十六年(1971)二月二日、本牧亭楽屋にて、聞き手は竹本喜久太夫さん(昭和六十一年逝去)です。

お家が義太夫だったんですか？

あのー、先代三生が、私の母の叔母ンなります。それで子供がないのでネ、私が九才の時に養女に貰われて来ました。生まれは明治三十六年です。母の母が(先代)三生の姉に当たりましてネ。大体芸人の一家ってんですね、先代の弟が五代目津賀太夫、母親が(初代)紋教でございます。そういう縁故でネ、やっぱし跡継ぎが欲しかったんでしょね、私が九才から行きました。随分やかましいやかましい人でしたけど、(私が)十三才で亡くなりました、六十四才で。

初舞台は十二でネ、口語りに出ました。浅草に金龍館と三軒並んでる所があったんですよ、何てましたか忘れちゃったけど、そこへ弾き語りで出ました(注・東京倶楽部)。

先代三生って人はなかなかやかましくうございましてね、その時分、柳橋に居りましたんですけど、柳橋から吾妻橋まで毎日往復、歩かされてましてね、それこそ一銭のお小遣いも頂きません。私が先代の所に行きました時に

はね、ご自分で「情けない情けない」って言ってました、「どうしてこんなに弾けなくなつたろう」って。リコーマチで三味線弾けないうつてんですけど、(私はまだ)子供のことでですから、弾けたのやら弾けないのやらわかりません。大変な名人だったそうんですけど、私は存じません。(先代三生が)小土佐さんもお弾きになったってことを、小土佐さんのお師匠さんから伺ったことがあります。

先代が亡くなってから一年ほど自宅へ戻りまして、それから、後見人の人が「六代目津賀太夫、六代目津賀太夫」って言うので、津賀太夫の内弟子になりました。六代目は五代目(注・初代三生の弟)のお弟子になります。

津賀太夫師匠のところへは三味線弾きとしてお稽古にいらしたんですか？

はい。(私は)語りは始まりから嫌いでした、三味線ばっかし習っておりました。(津賀太夫師匠には)なかなかお稽古して頂けませんでね、何でも聞き覚えで覚えろって。津賀太夫師匠のところですーっと内弟子でおりまして、十六の時に、初めて三味線弾きとして出た訳です(注・当時の芸名は津賀寿)。

小津賀さんがちょうど看板上げてましたからね(注・大正七年)、最初は宮松だったと思えます。それから東橋亭、琴平亭、方々その時分にあった寄席を廻りました。

三生(二代目)を継ぎましたのは二十一です、ね、数えの。みんな聞き覚えでございますからもう、ろくなこと……いま考えてみ

たら大変な看板上げだったんだろうと思えますけど、なかなかお稽古して頂けません。(津賀太夫師匠の所には)小津賀さん、(二代目の)紋教さん(注・前名は津賀栄)、播若さん、三代目綾之助さんも綾枝時代にお稽古に見えてました。大分商売人(注・プロ)の方がお見えになってました。でも、内弟子にはなかなかお稽古して頂けません、聞いて覚えろって。

ア、でも、お稽古もして頂きました。鉢の木とか、人のわからないようなネ。いま忘れちゃったけど、とってもまた結構でした、伏見とかネ。そういうものは、人さんのおやりにならないものは、お稽古して頂きました。

津賀太夫さんはよく引越しをする人でしたか……

私が参りました時には余り引越しませんでしたが、始まり行つたのが、下谷の数寄屋町でしたかね。上野の、この(本牧亭)そばです。そこへ内弟子に行きまして、それから新橋の資生堂の所だの新富町だの、ずいぶん替わりましたね。あの頃は(パンの)木村屋さんや巴仙さんなんかお稽古してましたね。素養の大家ばっかり稽古なさって。内弟子をやめてからお家を持ったんですか？

そうです。二十三の時に初めて一人で家を持ちました。

色んな人をお弾きになったんでしよう？

ずいぶん泣かされましたね。住登さんて方を弾いた時なんかはね、爪から血が出ましてね、意地の悪い人で、見台たたかれましたね、まあ、もう泣いたことが随分あります。住登さんって、髪の毛のいい格好の方で、我々が弾く人ではないんでしようけど、まあ無理に弾かして頂いたんでしようね。随分やかましい、気に入らないから見台たたかれましたね。いえ、悔しい思っているんじゃないかって、ただ情けなかつたですね。

内弟子時代のお給金は？

お師匠さんの姉さんの家に居りましたのでね、みんなその方に渡しましたから、いくら入ってたか知りませんでしたけど。十二の時に貰ってきた新聞紙に包んだワリが、二十銭くらいあったんじゃないかと思えます。幾日ものお給金ですけど。それも、神棚へあげてまして、これも(中は)見ません。見ませんけど、大分バラ銭が重かったから、私としては「二十銭くらい入ってるのかな」と子供心に思いました。

お客さんは、どの位入ったんでしよう。盛んだったんでしようねえ。

いえ、私が行った時はもう盛んではありません。十二の時でももう……洲崎亭ってのがありましてね、そこなんか本当にお客さんポチポチでした。木戸(注・入場料)は三銭か四銭だったと思えますね。

一番うれしかったことは、どんなことがありました？

そうですね、あのー、何にも自分でよく弾けたなっと思ったことはないんですけど、綱造先生にお稽古して頂きましたね、初めて阿古屋を弾きましたね、先生が前で聞いて下さった時が、うれしかったなと(思います)。

赤坂の猿之助さんの所に稽古に行っていました頃、團司さんのお弟子さんで小團司という方が名前替えしました。その時に、團司さんのお師匠さんに抜擢されました、私が團司さんを弾かして頂いたんですよ、長局を。その時は怖くって怖くってね、確か日本橋倶楽部だったかと思えますけど、震えて上がってましたらね、猿之助さんのお師匠さんと團司さんのお師匠さんが「もう稽古してあんのやから安心して弾きや」って。その時のうれしかったって無かったですね。そしてやっぱり高座にあがればビクビクもんで、ひとつも弾けなかったんですけど、今度お稽古に行きました時にね、大勢の連中さんの前で「どうです、この間の三生は、いつもの芸と違っていますよう弾きましたな」っておっしゃって頂いた時は、本当にうれしかったですね。もう三生になってかなり経ってましたから、三十二三三の頃だと思えます。

九つから始めて、三十二、三になつてそんなにうれしかったことがあつたから、義太夫は難しい芸術ですねえ。

全く難しいと思えます。今でももう迷って

しまいました、ひとつも弾けません。

時代物と世話物はどちらがお好きですか？

私はもう手が固いですから時代物の方が好きですね。津賀太夫師匠が三味線のお師匠さんでしたらね、もつと三味線にやましかつたんでしようけど、始まりからその通りで「聞き覚えで弾け」ってんですから、三味線こうだつていうことも言われたことありませんしね、ですから自分の我流が入つたのでねえ、やっぱり、マ、時代の方が弾きよかつたんでしようねえ。(津賀太夫師匠は)相対に、やかましくはなかつたですね。割にまあ子供のうちは聞き覚えでよく覚えただす。また、すぐ覚えただす。

もうハネましたね。又、折りがあつたら旅興業の面白さなんか聞かせて下さい。貴重な話を有難うございました。

口下手でございますから申し訳ございません。ハ、有難うございました。御免下さい。

(文責・補注 水野悠子)



語り語って

「仮名手本忠臣蔵」―三つの恋の物語り―

池田弘一

平成十七年十二月十四日、南青山のライブハウス「マンダラ」で昼夜二回の公演を催した。

私は大学で持っていた講座「日本芸能史」でのテキストを「仮名手本忠臣蔵」一本に定めて十五年余り、読み、書き、聞いてきた。テキストは一冊でも浄瑠璃の流れはもとより歌舞伎、講釈、落語、長唄・常磐津・清元などから端唄・小唄の類にまで学習は及ぶ。少なくとも近世芸能の基礎的なものについては知り得る。

受講する学生の顔ぶれは年々かわる。そして私の読み方、考え方、話し方もかわっていった。そうした営みの一つの区切りとして、舞台らしい構えも幕もないところで、酒盃を挙げている人を前にして「仮名手本忠臣蔵」を語ってみようと思ったのだ。実説とか真説とか称する巷談による赤穂浪士事件の話や歌舞伎・映画での演出にひっぱられることなく、私を読み思った「仮名手本忠臣蔵」を二時間で語り抜こうとしたのである。

誰に相談することなく義太夫節による演奏の部分は竹本越孝・鶴澤駒治・鶴澤駒清の三人の人にことをわけて頼み、私の思い通りの部分演奏をしてもらった。私は義太夫節そのもので通そうとは思わなかった。いわゆるス

トリーにあたるところは講談界の若手神田きらり君。講釈の部分、つまり私惑を加えて語る部分は私。そして長唄・端唄・尺八の方々にも応援を願った。

師直が顔世にしかけたよこしまな恋、万事はここに始まる。夫婦になれそうもない身分違いのお軽は腹を切ろうとする勘平の手にすがって女房宣言をしてのけて夫婦になる。似合いの夫婦になるはずだった小浪・力弥の仲は破局を迎え、娘の恋の成就をはかって本蔵は死ぬのだ。「振るにも振りようがあるものを」というのが、私の話の中の一つの柱だ。

新古今・釈教の歌を師直につきつけ、四段目で「恥しめてやったらば」と言っていた顔世。私は好きになれない。もう一つの柱は「小身者は今も昔もどうしてこも真っすぐなのだろう」だ。「御恩に高下はござりませぬ」と言い切って妹を殺そうとまでする平右衛門、しみじみやりきれない。

ほんとするのは「財布の焼香」での由良之助のひとことだ。「金もどしたは由良之助が一生の誤まり」と言い、平右衛門に財布を香炉の上にかけてさせ、「二番の焼香早野勘平重氏」を高らかに呼ばわらせる由良之助、これがあってこそ「仮名手本忠臣蔵」は名作として成立するのだと考える。

前評判は上々。「邦楽の友」には三頁にわたる期待の辞が載り、「東京新聞」も写真入りで報じてくれ、「芸界新聞」の広告は無料なのに大々としたものであった。

二回の公演はほぼ満席、お客さまにも残っ

ていただいでの上上げは十一時過ぎにまで及んだ。出演者の苦勞・努力もさることながらスタッフの人々、マンダラの人々の感動に満ちた協力は有り難いものであった。

さて、後の評判は、義太夫界からのそれは厳しく、否定的なものが聞こえてきた。もっともなことだ。六段目では身売りもなければ腹切りもない。ただ語られたのは婆の嘆き、その悲惨であった。義太夫の世界に身を置いて生涯をかけている人々にとって、抜き抜きの語りが気に入るはずはない。しかし責任は私にあるのであり、演奏者の問題ではない。

義太夫界以外の音曲の世界の参加者は、太棹の魅力、語りの迫力など自分たちの世界にないものに本気で向き合ってくれた。「忠臣蔵」といわれているものと「仮名手本忠臣蔵」とは違うことがわかったという人もあり、「この次は何を」、「再演は」という言葉もうれしく聞こえてきた。



II 特集 II その四

協会のお宝



『鶴澤英治師の三味線と駒』

前三回は、床本や章本・朱ノト等を竹本葵太夫が紹介したが、今回は本類ではなく、昭和60年に亡くなられた鶴澤英治師（大正2年生、四代目鶴澤清六師門、前名徳若、文案座・新義座を経て昭和47年より竹本連中として活躍）御寄贈の三味線と駒を紹介したい。

英治師の父上は、節盡し集を作ったり、三味線・駒の改良を試みたりの研究家としても名高い五代目鶴澤勇造師（明治12年生、明治後期から昭和初期に活躍、五代目鶴澤文蔵門）である。英治師も胴の素材の研究や、これは私と一緒に白鳳堂での人造皮の試作に力を入れておられた。昭和49年に「父が研究用に作った三味線を協会に」と寄贈されたのが、カリンの根の部分で作られた延べ棹の三味線と、黄金木（ナラカシワ）で作った三ツ折の三味線の二挺であった。何れも名人柴健の作品である。前者は高音がよく鳴ったそうだが、現在は延べ棹のせいで少しゆがみがある。後者は文字通り一寸くすんだ黄金色で、柴健が気を入れて作ったという美術品ともいえる逸品である。柔かい音がしたという。

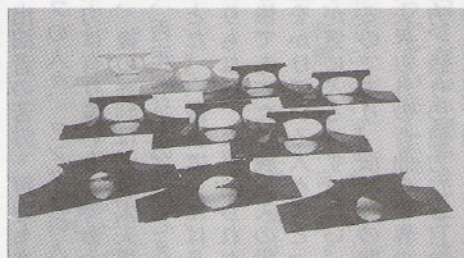
翌50年には、勇造師編の「節盡し集」と共に、吉金に作らせた「刃の高い駒10ヶ」桐箱入りで寄贈された。通常駒の刃の高さは18ミリ位だが、これは20ミリ位ある。その他種々作らせたそうだが、やはり18ミリ位が工合が良かったそうである。三味線とい、駒とい、実験の為の試作品を一流の人に作らせている勇造師は凄い人だと思ふ。

英治師には「柴健」や「吉金」その他について会報に書いて頂きたいとお願したところ、何年かたった昭和59年の第32号に「吉金の駒のこと」が寄贈された。それには大団平師と初代吉金によって現行の駒となったこと、素材の黒水牛・紅水牛・白水牛のこと、その他素晴しかった。「次に柴健や胴源のことを書きます。そして白水牛などを交え刃順に揃えた駒30ヶ程を寄贈します」と約束されたが、翌60年に急逝されたのは誠に残念極まりない。

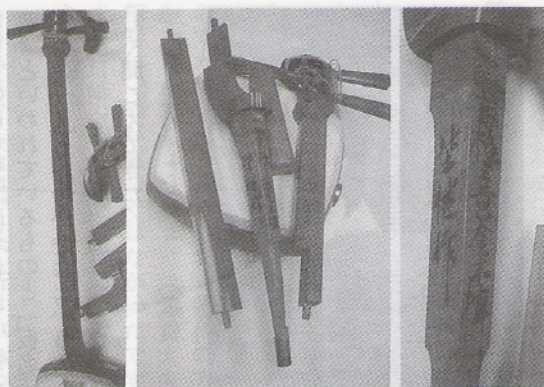
しかし半年後に、息子さんより、竹本関係の朱本・テーフ多数と共に、お約束の駒30ヶが寄贈されたのである。以上、鶴澤英治師の資料価値最高の三味線二挺と駒40ヶ（内4ヶ紛失、持出された人は秘かに返却のこと）を没後二十年に当り紹介することが出来た。

次号には「行方不明のお宝」（朝太夫師の遺品の見台とか、大正6・7年頃の義太夫名鑑など）と「お宝になり損ったお宝」（幻の弥七の大三味線）について書いてみたい。

（竹本綾太夫）



前列：幕末頃の駒
中列：刃の高い駒
後列：象牙・白水牛・紅水牛・黒水牛の駒



左：カリン延べ棹 中：黄金木の棹
右：最極上黄金木棹・柴健作の銘

 協会の動き
 06年1月より
 06年7月まで

1月7日 「ぎだゆう座」初春スペシャル公演
 於お江戸両国亭

1月13日 「義太夫に親しむ」ワークショップ
 於東京新橋組合

1月19日 文化庁重点支援事業説明会
 於駒場エミナース

女流義太夫演奏会「壺坂」他
 於国立演芸場

1月20日 西野浦歌正会員資格審査
 於東京新橋組合

1月30日 普及部会
 於協会資料室

2月1・2日「ぎだゆう座」二日間
 於上野広小路亭

2月22日 女流義太夫演奏会 伝承者研修
 於国立演芸場

3月1日・2日 「じょぎ」公演 二日間
 於上野広小路亭

3月4日 都民のための邦楽演奏会
 於国立小劇場

3月11日 鶴澤駒登久三回忌追善演奏会
 於回向院

3月18日 義太夫教室OB演奏会
 於東京証券会館ホール

3月20日 芸団協総会

3月22日 女流義太夫演奏会「菅原伝授
 手習鑑」
 於国立演芸場

3月23日 第58期義太夫教室閉講
 於人形町スタジオ

4月1・2日「ぎだゆう座」二日間
 於上野広小路亭

4月7・8日 第3回はなやぐらの会
 於ほり川

4月15日 備品部作業日
 於本郷稽古場

4月18日 女流義太夫演奏会「土佐将監住家
 の段」他
 於国立演芸場

4月19日 文化庁支援事業ヒアリング
 於文化庁

4月20日 「基本方針見直しについての会員
 団体意見交換会」
 於芸能花伝舎

4月22日 1日体験教室
 於人形町スタジオ

4月25日 吉川先生お別れの会
 於千日谷会堂

4月27日 邦楽会議
 於ルノール渋谷パルク横店

5月1日・2日 「じょぎ」公演 二日間
 於上野広小路亭

5月11日 邦楽会議総会
 於芸能花伝舎

5月12日 編集会議
 於協会資料室

5月12日 臨時理事会
 於協会資料室

5月20日 第84回大日本素義会
 於鳥越神社白鳥会館

5月22日 女流義太夫演奏会「御殿の段」他
 於国立演芸場

5月25日 義太夫教室第59期開講
 於人形町スタジオ

5月27日 Cafeで義太夫
 於絵李花

6月1・2日 「ぎだゆう座」二日間
 於上野広小路亭

6月10日 吉達会
 於かくえホール

6月19日 女流義太夫演奏会「宿屋の段」他
 於国立演芸場

6月22日 芸団協総会
 於オペラシティ会議室

6月23日 第4回たつみ会
 於オペラシティ会議室

7月1日・2日 「じょぎ」公演 二日間
 於上野広小路亭

7月15日 会報第83号発行
 於上野広小路亭

《今後の予定》

8月19日(土) 1日体験教室
 於人形町スタジオ

9月16日(土) 巴の会
 於厚木市文化会館

10月8日(日) 駒之助の会
 於紀尾井小ホール

11月8日(水) 竹本朝重りさいたる
 於日本橋劇場

国立演芸場 女流義太夫演奏会

年月日	曜
18年8月22日	火
9月26日	火
10月24日	火
11月16日	木
12月19日	火
19年1月18日	木
3月5日	月
3月22日	木

開場 6時
開演 6時半

※来年2月は会場の都合により公演がありません。
伝承者研修発表会は3月5日に開催致します。

《訃報》

早川 勉(特別会員)

平成十七年十二月十四日

榊原 功(特別会員)

平成十八年四月

吉川英史(義太夫協会最高顧問)

平成十八年 四月十三日

竹本素八(正会員・義太夫節保存会会員)

平成十八年 四月十三日

吉川英史先生と義太夫協会

昭和46年5月の会報「法人設立創刊号」の吉川会長挨拶の冒頭に「協会の幹部の中にはNHK邦楽育成会の出身者がいる。それが協会とわたしとを近いものにしていく。」と書いて会長としての所信を述べておられる。

昭和33年頃、まだ任意団体であった協会の湊太夫理事長と先生は面識の仲で、協会の顧

問になっておられ、芸能人健康保険にも入っておられた。当時は協会が集金し、一括して納める仕組みだったので、半年に一回私が信濃町のお宅に集金に伺った。そんな或る日「NHK邦楽育成会に入ったらどうか」と奨められ、綾之助さんと共に39年度十期を出た。

その数年後、協会の法人化が近くなった時、松太郎会長が亡くなり、湊太夫理事長が病で引退された。会長を顧問の中からお願いすると幹部会で決まり、私が使者として先生宅に伺い、御内諾を得たので、昭和45年4月仙廣副会長と再度伺い御承諾を得た。その御陰で認可が早まり、6月に社団法人となった。

以後は周知の如く、怠惰な私共を督促し、種々の雑事をこなされ、今ある協会の基礎を作って下さった。そして田辺先生・景山先生・波多現会長の道筋をつけて下さった。こんなに会長に恵まれた協会は他にないであろう。会員一同と、吉川先生の御遺徳を偲び、御冥福をお祈り申上げるものである。

竹本綾太夫

《寄贈》

上がり糸

竹本連中三味線方

見台 2台

河野哲丸様

肩衣 5組

〃

床本 29冊

〃

稽古本 47冊

〃

Sレコード 26枚

〃

締太鼓 一式

〃

鉦 一式

〃

早速、肩衣はOB会で使わせていただきました。見台は本郷の稽古場で使用中です。

【編集後記】

○無事済んでよかった

(T)

○編集部員の方々お疲れ様。

(T2)

○風邪ひかない歴を更新中でしたが、ついに一年半目でストップしました。皆様も夏カ

(Y)

ゼなどに気をつけて下さい。

(S2)

○来てよかったです。

(S)

○最近、古曲が好みます。

(K)

○皆さん夏バテに気をつけましょう。

(K)

○いつまでも人の心に生き続けることでしょう。意志を継いでがんばらなきゃ!

(K3)